

FIELD NOTE

no.162



**WILDLIFE
MANAGEMENT
OFFICE**

2024.4

目 次

FIELD NOTE 2024 年 4 月号 No.162

1	生物多様性とワイルドライフマネジメント（3） WMO への期待	小泉 透
9	タイのサル問題	奥村 忠誠
13	海外研修報告～マレーシアにおける野生動物管理～	小林 祥
18	新人紹介	神田 有香音 松井 裕美 鉄谷 龍之 島田 駿 平川 亮太 鳥山 哲 井上 莉央南 赤松 萌鈴 海田 喜久枝 山崎 耕造
28	WMO活動報告 2024 年 1 月～3 月	
17	表紙の絵	大西 勝博

生物多様性とワイルドライフマネジメント（3）

WMO への期待

小泉 透（国立研究開発法人森林研究・整備機構フェロー）

これまで、生物多様性をめぐる国内外の動きとワイルドライフ問題が JBO や生物多様性国家戦略にどのように位置づけられているのか、を中心にお話ししてきました。

今回は連載の最終回として、ワイルドライフ問題と問題解決のための WMO への期待、についてお話ししたいと思います。

人口減少時代の持続可能な社会デザイン

「生物多様性国家戦略 2023～2030」に、こんな一節があります。

「耕作放棄地や利用されないまま放置された里山林などがニホンジカ、イノシシなどの生息にとって好ましい環境となることや、狩猟者の減少・高齢化で狩猟圧が低下することなどにより、これらの野生鳥獣の個体数は著しく増加してきた…（略）…（これらの動物の、筆者注）分布域は依然として拡大しており、生態系への影響や農林業

被害が発生している。…（略）…中山間地域の自然環境や社会環境の変化により、クマ類の市街地出没やそれに伴う人身事故が発生して」（13 ページ）おり、この背景には「産業構造や資源利用の変化と、人口減少や高齢化による地域の活力の低下」（13 ページ）があるとしています。

2020 年の日本の総人口は 1 億 2614 万 6 千人、2010 年の 1 億 2805 万 7 千人をピークに減少し始め、2050 年には 1 億 385 万 7 千人、2070 年には 1 億人を割り込んで 8699 万 6 千人にまで減少する、と予測されています（厚生労働省、2023）。人口減少社会への対応は、いまや日本政府を挙げて取り組む最優先政策となっています。

ところで、現在の人口規模は日本の歴史の中でどのように形成されてきたのでしょうか。

図 1 に、1600 年から 2070 年までの日本の人口推移（2030 年以降は予測値）を示しました。

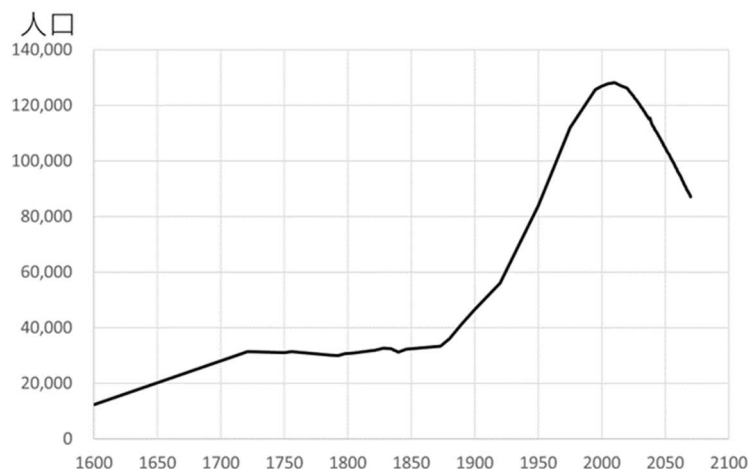


図 1 1600～2070 年の日本の人口推移

鬼頭（2000）、総務省（2023）、厚生労働省（2023）より作成

江戸期の約 270 年間、江戸は当時としても世界的な大都市となっていました。日本全体の人口は約 3000 万人でほぼ安定していました。この状況は、明治に入って政体が大きく変化し中央集権体制が確立するにつれて大きく変化し、人口は急激に増加し始めます。明治末には約 5000 万人に達し、第二次世界大戦後も増加が続いて 1975 年に 1 億人を超え、2010 年のピークへといたります。江戸期（1600～1850 年）の人口の年増加率は 0.001 でしたが、明治から平成（1870～2010 年）では 0.005 と 5 倍近く高くなりました。「富国強兵」「戦後復興」「高度経済成長」「バブル経済」と、この 150 年間の日本の人口は経済の拡大と平行に推移してきました。この結果、国土の 0.3% を占めるに過ぎない東京 23 区、名古屋市、大阪市に巨大な経済拠点が形成され、人口の 12% が集中するという状況ができあがってしまいました。これらの地域では、現在も年間 110 万人の流入超過（転入者数が転出者数を上回る）が起きています。日本の人口問題は、総数の減少だけでなく、人口移動によって過密化と過疎化が同時に進行していることにあるといえます。人口減少が顕著になり始めた 2019 年末に日本を襲った新型コロナウイルスのパンデミックは、人口集中域における危機管理の脆弱さを露呈するとともに人口を集積させて経済を拡大させるという従来の成長モデルがすでに機能しなくなったことを示す、極めて象徴的な出来事となりました。

現在も、人口減少に対応した社会モデルについてさまざまな提言が行われていますが、2017 年 9 月 5 日に京都大学と日立製作所が共同で発表した「AI の活用により、持続可能な日本の未来に向けた政策を提言」は大変興味深く、各方面から大きな注目を集めました。これは、京都大学と日立が開設した日立未来課題探索共同研究部門（日立京大ラボ）が、社会変動に関係する 149 の要因を組み合わせ、AI を用いて 2 万通りの未来の社会像をシミュレーションし、人口が都市へ集中した場合

と地方へ分散した場合のメリットとデメリットを比較考察した報告です。結論として、人口や経済などの社会拠点が地方へ分散した場合、または、地方と都市が連環を取りながら共存する場合に利得が大きいとしています。前々回で紹介した「自然共生圏（地域循環共生圏）」の考え方に共通がみられると理解してよいと思います。ただし、今度は地方の中で一極集中社会が形成されないように注意しなければなりません。もともと人口規模が小さい地方で中核都市へ人口移動が起きると周辺地域は過疎というより無人化してしまう可能性があります。ワイルドライフにとってみると、無人化エリアに定着してさらに外側に移動分散すると、そこはいきなり人口密集地帯だった、ということになります。都会へ出沒するワイルドライフが人身事故など生活の安全と安心をおびやかしてしまう問題は「アーバンワイルドライフ問題」と呼ばれていますが、この問題の背景にはワイルドライフの個体数の増加だけでなく、都市の環境構造に起因する脆弱さが関係していることも考えなければなりません。JBO3 は、ワイルドライフ問題を「生態系のディスプレイ」と表現していますが、緑豊かな地方都市の住民はワイルドライフのもたらす不都合と常に背中合わせであること意識する必要が出てきています。

どのようにしたら地方の中で再び人口の過密化と過疎化を起さないようにするか。解決の方策は単純ではありませんが、地方では都市と農山村の物理的距離が近いという特徴を活かして、都市から農山村の一次産業と自然環境へ積極的に資金と人材を投資して自然資本を育成しながら過度の人口集積を避け、農山村から都市へ生態系サービスを提供して恩恵をシェアする、という循環関係を意識的に作っていくことを提案したいと思います。

日本学術会議「人口縮小社会における野生動物管理のあり方」

日本学術会議は、2019 年に「人口縮小社会にお

ける野生動物管理のあり方」を発表しました。環境省自然環境局長の依頼に対する回答となっています。現在でも、全文をウェブで閲覧できます。

最初にワイルドライフ問題を考える基本プロットが提示されます。

「日本列島における人口動態の空間的なパターンを大きく支配しているのは人口移動である。人口縮小地域においては、大きなE（移出、筆者注、以下同じ）ゆえに ΔN （人口変化）がマイナスの値をとる。しかも移出が若年層に特異的であることから人口の高齢化を介してB（出生）の低下も起こり、人口縮小はいっそう加速される。このような空間特異的・年齢特異的な人口変動と強く関連して耕作放棄が増加する。これは、日本に限らず現在の世界に共通する傾向であり、その背後にある経済的な法則性は、ペティ・クラークの法則として知られている」（3ページ）。多くの識者や政策決定者が「人口減少時代における社会のあり方」を模索し提言を行っているにもかかわらず、日本学術会議が「経済法則によって農村の過疎化は不可避である」とワイルドライフ問題の構造を規定してしまったのは残念でした。世界的に環境政策にバックキャストिंगの思考が求められる時代に、まずはワイルドライフと共存する社会像を提示していただきたかった、と心残りの感じがします。このような課題設定では、前節で取り上げたアーバンワイルドライフの問題を理解することも対処することもできないように思います。

「有効な獣害対策が取られない限り、獣害が引き金になる耕作放棄は、今後さらに急増することになるだろう」（4ページ）と、この提言では「人口縮小社会」というより「人口縮小地域」における「有効な獣害対策」（処方箋）を提示することを目的としてしまいましたが、将来の望ましいワイルドライフとの関係を想定しないフォアキャストिंगな提言になったことは改めて残念な思いがします。

「有効な獣害対策」として以下の5つの提言が

なされました。

- (1) 統合管理のための省庁間施策連携と基礎自治体の専門組織力の強化
- (2) 地域資源を持続利用するためのルールとしくみの必要
- (3) 管理放棄地も含む包括的土地利用計画のための科学と基礎自治体並びに地域コミュニティの役割
- (4) 科学的データの集積と運用のための市民に開かれた学術研究のしくみの構築
- (5) 地域に根差した野生動物管理を推進する高度専門職人材の教育プログラムの創設

このうち、紙面の関係から、ここでは(1)に絞ってみていくことにしましょう。

(1) では、「国土レベルから局所レベル（市町村・集落）までを階層的・整合的にカバーする科学的な計画を策定し、それらの業務を担う専門職員として市町村に鳥獣対策員、都道府県に野生動物管理専門員を配置し、農政・林政担当職員と協働するしくみを構築 すべきである」（17 ページ）としています。

ワイルドライフマネジメントは公共サービスの一つと考えられ、特に日本では野生鳥獣に無主物性の原則がありますから、公的機関が公的資金で対応することに異論はありません。また、専門教育を受けた者を行政機関に配置することには、特に研究者に、ポジティブな意見が多いようです。

たとえば、2023年7月14日付の朝日新聞は、『「ヒグマが人の社会に適応」学者ら、北海道に未来見すえた対策求める』と題した記事を掲載しました。北海道各地でヒグマへの警戒が高まっていることを踏まえ、「ヒグマの会」の学者グループが北海道知事に対して、野生動物管理が専門の職員をすべての振興局に置くこと、試験研究機関での継続的なモニタリングや管理計画を実行すること、を骨子とする提言をおこなった、というものです。

確かに、個人でも対応可能な中型クラスのワイルドライフでは専門職員の活動によって成果を上

げている自治体もあります。一方、シカ、イノシシ、クマなどの大型のワイルドライフでは、治安や防衛の分野に似て、集団での実力行使が求められる場面が数多くあります。したがって、配置された「野生動物管理専門員」には、実力行使が可能なチームを新たに組織するか、既存の警察や自衛隊を指導して対応技術を訓練する、ことが求められます。そのどちらもできなくて、机の前で「階層的・統合的にカバーする科学的な計画を策定」するのが日常業務になるのであれば、私は専門教育を受けた者を行政機関に配置する必要はない、ワイルドライフマネジメントを専門とする民間事業体の職員として OJT を施してもらいながら技術の向上を図るのが望ましい、と考えます。

ヒグマに関連して、2023 年 7 月 24 日付の朝日新聞にはこんな記事がありました。

「ヒグマまで 5 メートル『今だ！噴射しろ』教員がクマ撃退スプレー訓練」

ヒグマの出没が相次ぐ網走市内の小学校で、網走警察署が企画して教員を対象に訓練をおこなった。講師は、知床で野生生物の保護・管理活動や環境教育を行っている知床財団の職員二人が務めた、というものです。

知床財団のホームページには、「ヒグマに対する知床財団の考え方」というサイトがあり、「知床財団が行うヒグマ対策って、実際どんな対策？」「対ヒグマ 出没時の対策」「対ヒグマ 防御的対策」「対人 出没時の対策」「対人 防御的対策」と、ヒグマと対峙した現場経験に基づいた解説が続きます。

ですから、派遣された知床財団の講師は、新聞の見出しにあるようにスプレーのボタンの押し方だけを教えたわけではないはずです。

デジタル技術がどれだけ発達しても、ワイルドライフマネジメントの分野では、マネージャーが自らの頭で考え、実際に手を動かして、一件一件の問題に対処しなければなりません。そして同時に、こうした経験を組織や集団の中に蓄積させて

共有し OJT のソースとして継承させていく、ことが大事です。私が、専門教育を受けた者こそワイルドライフマネジメントを専門とする民間事業体で腕を振るうべきだ、と述べたのはこのような理由によります。

もうひとつ、少し古い話ですが、2004 年と 2006 年に本州でツキノワグマが異常な頻度で人里に出没し、大騒ぎとなりました。

この時、京都でシンポジウムがありました。本州各地の報告を受けて、最後に知床財団の山中正美さんが、

「異常出没と言いますが、斜里町では毎年このくらいの頻度でヒグマが出没しています。しかし、この 10 年斜里町では人身事故は起きていません。」とコメントしました。

私もその場にいましたが、大変印象的な場面でした。このことをきっかけとして、私は「専門の民間事業体が先導するのが日本のワイルドライフマネジメントのモデルである」という論を持つようになり、2014 年に「認定鳥獣捕獲等事業者」制度の創設にかかわることになりました。

バックキャスティングとロジックモデルによるシカ管理

生物多様性では、バックキャスティングとロジックモデルに基づく計画が世界基準となっているにもかかわらず、日本学術会議の提言はアウトカム（状態目標）が欠落したフォアキャスティングによる対策にとどまった、と述べました。

ということで、バックキャスティングとロジックモデルを志向したシカ管理として、富士山南麓静岡県側に位置する富士山国有林の事例を紹介します。

最初にことわっておきますと、富士山国有林を管理する静岡森林管理署にはシカ管理の専門教育を受けた職員は配置されていません。これは管理を実行する上で障害にはなっていません。捕獲事業を受託した民間事業者が事業結果を自ら客観的

に評価し、森林管理署はそれを受けて仕様書を改善して翌年度の発注に活かす、を繰り返して順応的なプロセスを担保しているからです。

富士山は 2013 年に世界文化遺産に登録されましたが、それ以前から「富士箱根伊豆国立公園」の一部として、数多くの自然保護区が設定され、シカの捕獲を厳しく制限してきました。このため、富士山周辺には高密度なシカ个体群が形成され、富士山国有林でも 2011 年には全域で深刻な森林被害が報告されるようになりました。

現在は、国有林の約 4/5 の約 8,000ha で管理を行っています。ここではもっとも古くから捕獲を行ってきた北西部の「人穴東地区」(1,500ha) について紹介します。人穴東地区では 2011 年末から 21 か所で約 40 日間給餌を行い 2012 年 1 月に捕獲を行いました。2 人が 1 日 5 時間 6 日間活動して 73 頭を捕獲しました。2013 年 1 月には給餌期間を 14 日間に短縮し、2 名の射手が 12 日間活動し 199 頭を捕獲しました。捕獲効率は、それぞれ、周辺地域における一般的な猟法の 20 倍と 50 倍になり、成果は森林・林業白書に紹介されました。

捕獲終了後に、関係者で 2 年間の総括を行いました。

まず、たくさん獲れるのはシカがたくさんいる

からだ、これを減らすのは容易ではない、という意見が出ました。そこで、シカが減るように獲る、シカが減っても獲る、ことをアウトカム（状態目標）としました。何頭捕獲したかはアウトプット（行動目標）であってアウトカムではないことに注意してください。

また、シカが減っても森林整備に支障があっては意味がないという意見も出ました。そこで、シカが生息していても森林の更新に支障が生じない状態へ誘導することを最終的なアウトカム（ミッション、または、ビジョンと呼ばれる状態目標）とし、个体数がきちんと減って下層植生が回復してくる、防護柵がなくても人工造林が可能になってくる、防護柵がなくても天然更新が可能になってくる、などを指標としてビジョンにいたる段階的なアウトカムを設定しました。

さらに、シカの个体数が相対値でもよいから把握されないと捕獲の効果が客観的に測定されない、という意見がありました。予算の関係で大規模な个体数調査をすることができませんでしたので、人穴東地区の 1,500ha の中に 31 カ所の固定点を定めてカメラトラップを設置し、シカの撮影数を捕獲とは独立した个体数（密度）の指標としてトレンドを継続して測定していくことにしました。

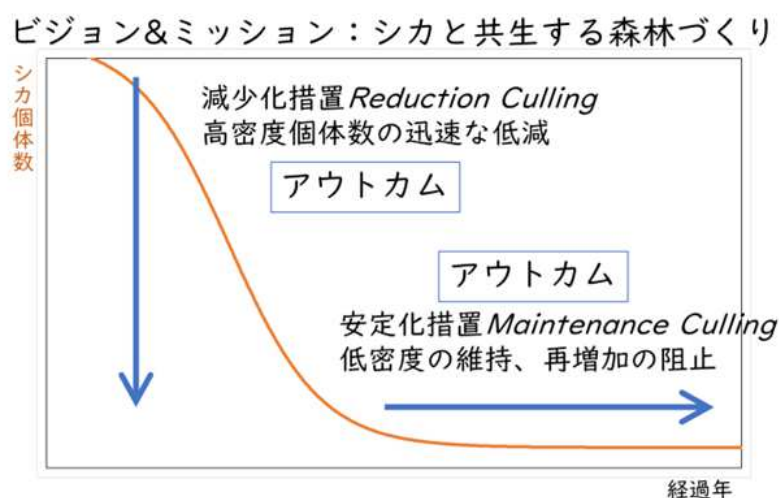


図2 富士山国有林におけるシカ管理の進行管理（捕獲）

ビジョン&ミッション：シカと共生する森林づくり

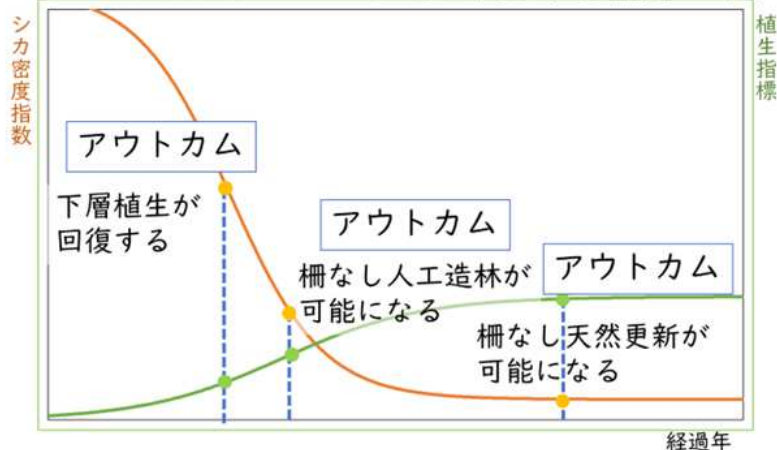


図3 富士山国有林におけるシカ管理の進行管理（植生）

こうした枠組みを定めて捕獲を継続させた結果、人穴東地区では2012年から2020年の9年間に1110頭を捕獲し、密度指数は1/5程度まで低下しました。繰り返しますが、1110頭を捕獲したことはアウトカムではありません、アウトプットです。密度指数を1/5まで低下させたことがアウトカムです。

下層植生の被度は、2011年当時10%未満のプロットが全体の70%を占めていましたが、2021年には20%に低下し、被度20%以上の割合は約2倍に増加しました。下層植生のアウトカムが達成されてきたことを受けて、2019年から防護柵の外側、シカが自由にアクセスできる場所、にも柵内と同じ仕様でヒノキを植栽する「柵なし造林試験」を始めました。ここでも捕獲の効果をカメラトラップで測定し、シカの出現頻度が極めて低く抑制されたことを確認しました。この結果、柵なし造林試験地のヒノキも防護柵内の植栽木と同程度の成長率を示し、2023年には平均樹高が150cmを超えると予想されました。現在、柵なし造林のアウトカム段階へ入ったと判断して、柵なし造林の例数を増やしているところです。

富士山国有林のシカ管理は静岡森林管理署の公

共事業費により実行されていますが、先にも述べたように、森林管理署にはシカ管理の専門教育を受けた職員は配置されていません。

でも問題ありません。育林や治山の経験から、きちんとした仕様書を書いて発注できればよいのです。

富士山のシカ捕獲の原則を仕様書に照らし合わせてみましょう。

原則1：捕獲数最大ではなく獲り逃がし数を最小にする、に対しては、仕様書では「連続して頭頸部を狙撃する技術を有する者が狙撃者となること」を求めています。また、捕獲成功率（1頭のシカを捕獲するのに消費した実包数）を報告することになっています。ちなみに、捕獲を受託している静岡市に拠点のあるNPO法人若葉の捕獲成功率は99%です。成功率80%を下回ると射手にはなれません。射撃技量が高いこともさることながら、無理をしない、失中しなければチャンスはまたある、という判断基準が徹底されて高い捕獲成功率を達成しています。

原則2：捕獲の効果は捕獲から独立した方法で客観的に測定する、については受託事業者自らがモニタリング調査を行うこととしています。NPO

法人若葉は、カメラトラップの管理は得手ではありませんので、静岡の高山自然環境調査所に入ってもらいましたが、若葉のメンバーにもカメラのメンテナンスを手伝ってもらい、モニタリング調査とはどんなものなのかを理解してもらっています。

原則3：シカの状況、捕獲効果について関係者間で理解を共有する。NPO 法人若葉は実際にシカを捕獲しながら、高山自然環境調査所はカメラトラップの画像を解析しながら、シカの状況を把握していますが、肝心の発注者の森林管理署では、画像や集計が上がってきても状況を理解できません。そこで、森林総研や静岡県森林・林業研究センター、地元の常葉大学が参加して実行委員会を開催し、データをGISなどで処理して「見える化」して関係者全員で理解が共有されるようにしています。

このようにして、森林管理署に専門職員がいなくても、捕獲者や調査者と同じ程度にシカの状況を把握できています。これが捕獲事業を継続させるうえでとても大事なことです。

勝手にコンサルが大事

最近、多様な主体を捕獲に参加させて捕獲数の乗せを図る、という意見を耳にするようになってきました。私は反対です。多様な主体が手あたり次第に捕獲を始めると捕獲数や捕獲効率はずぐに頭打ちになってしまいます。シカやイノシシが奥山域に逃げ込んで、行動圏を人間のアクセスが困難な地域にシフトさせてしまうからです。森林被害を起こさないイノシシでしたら集落周辺と里山域から追い払えば問題はほぼ解決ですが、シカの場合は、ご存じのように、シフトさせた新たな生息地で植生に大きな影響を及ぼすようになりますので、問題の解決を一層困難にしてしまいます。

富士山国有林のシカ管理に携わりながら、動物の捕獲については2つの教訓を得ることができました。ひとつは、捕獲に従事する者には強いガバ

ナンスが求められる、ということです。ここでいうガバナンスとは、やるべきこととやってはいけないことを事前に徹底させる、ということです。このことに気づいてから、既存のスポーツハンターを動員して実施されている捕獲が何故うまくいかないか、が理解できるようになりました。もうひとつは、捕獲を持続させて効果を上げていくためには動物をおびえさせないことが大事、ということです。おびえさせるとは、捕獲によって動物が生態や行動様式を変化させてしまう、ということです。おびえさせなければ、動物の生態や行動に合わせて捕獲のフォーメーションを組み、持続的な捕獲が可能になりますが、その逆のことが実に多くの現場で行われています。私は巻き狩りを否定するものではありませんが、このようなく乱をとまなう捕獲では捕獲成功率を100%にしないと、動物は「おびえて」しまい継続的な捕獲を困難にしてしまうでしょう。

結論を述べれば、ワイルドライフマネジメントにおける動物捕獲は、複数の専門的捕獲技術者を抱える認定鳥獣捕獲等事業者の仕事だと考えています。いくら専門教育を施されたからといって、ひとりでは大型獣管理の指導も実行も無理ですし、認定鳥獣捕獲等事業者がサポートすれば行政機関の担当者は専門的に教育されている必要はありません。

最後に、認定鳥獣捕獲等事業者には、どうして等がついているか、お話しして幕を閉じることになります。

ご存じのように、この制度は2014年の法律改正にともなって創設されましたが、実はその方向は2014年1月に中央環境審議会が出した答申に示されていました。

答申の7ページには、こんな文章があります。

(3) 効果的な捕獲体制の構築

① 鳥獣の捕獲等を専門に行う事業者を認定する制度の創設

…(中略)…認定された事業者(以下「認定事業

者」という。)が行う業務としては、都道府県や市町村等の鳥獣管理に関する計画に基づいて、高度な捕獲技術が求められる効果的な捕獲や、地域の課題に即応した地域密着型の捕獲を行うことが想定される。また、**認定事業者が鳥獣の生息状況等のモニタリングや計画策定・評価等にも関与するなど、地域の鳥獣管理の担い手となることも期待される** (太字、筆者)。

ですから、この事業者は認定鳥獣捕獲事業者ではなく認定鳥獣捕獲「等」事業者なのです。事業者には、日本の公的機関に対応できないワイルドライフマネージャーとしての活動が期待されている、ということです。このことは、事業者自身にも発注者である公的機関にもあまり理解されていませんので、認定鳥獣捕獲「等」事業者のプライドとして受託した仕事の締めくくりには「あなたの自治体の対応はここが悪いから、よくするためにこう改善しなさい」と勝手にコンサルタントすることをお勧めします。

WMO の正式名称は、もちろん、Wildlife Management Office ですが、Wildlife Managers' Office でもあってほしいな、と思っています。

野生動物保護管理事務所の今後のさらなる発展をお祈りいたします。

(完)

「追記」

本稿は、2023 年 9 月 6 日に野生動物保護管理事務所本社で行った講演「生物多様性とワイルドライフマネジメント」の抄録です。講演をご準備いただいた皆様、また、抄録の掲載をご承諾いただいた「フィールドノート」の編集委員の皆様には、厚く御礼申し上げます。

なお、私の原稿をほぼ原文のまま掲載いただきました。したがって、本文中の未熟な意見・見解についてはすべて私個人に責任があります。

参考資料

鬼頭 宏 (2000) 人口から読む日本の歴史. 講談社.

総務省 (2023) e-Stat 国勢調査

https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00200521&result_page=1 (2024 年 4 月 1 日確認)

厚生労働省 (2023) 日本の将来推計人口 (令和 5 年推計)

<https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/001091139.pdf> (2024 年 4 月 1 日確認)

京都大学・日立製作所 (2017) AI の活用により、持続可能な日本の未来に向けた政策を提言

<https://www.hitachi.co.jp/New/cnews/month/2017/09/0905.pdf> (2024 年 4 月 1 日確認)

日立製作所 (2021) 人間と AI の協働で切り拓く新たな価値に根差した持続可能な社会

<https://www.hitachihyoron.com/jp/column/ei/vol27/index.html> (2024 年 4 月 1 日確認)

日本学術会議 (2019) 人口縮小社会における野生動物管理のあり方

<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-k280.pdf> (2024 年 4 月 1 日確認)

知床財団 BROWNBear 私たちの考え方と取り組み

<https://www.shiretoko.or.jp/higumanokoto/higuma/> (2024 年 4 月 1 日確認)

タイのサル問題

奥村 忠誠 (WMO)

今年の3月にタイでサルを観察する機会を得た。タイにはニホンザルと同じマカク属に分類されるベニガオザル、カニクイザル、ミナミブタオザルや、テナガザル属に分類されるシロテテナガザル等が複数生息しており、生息種数は15種ともいわれている。ニホンザルしか生息していない日本からするととても想像ができない。タイの森林面積は2010年時点で18,972千haであり、国土に占める割合は37%である。一方日本の森林面積は24,979千haであり、森林率は69%とされている。生息地の面積を想像しても、狭い地域に複数種が生息していることがわかる。それらの多くの種はタイの森林地域に生息しているが、市街地周辺に生息しているような種もあり、そのような場所では日本と同じようにサルと人間の軋轢が起こっている。今回はバンコク南部のペッチャブリー県において、そのような環境に生息しているカニクイザルとベニガオザルを観察できた。

カニクイザルを観察するためまずは Khao Yoi という町に向かった。ここは岩山を中心にその周辺に商店や小学校、警察署があるような場所であった。現地に着いた時にはカニクイザルが商店の屋根の上や電線に登っていた。道路には今年生まれのような子ザルが轢かれているが、誰も気にしていない。屋根に上っているサルに対しても特に追い払うことはしていないが、店にはパチンコが準備されていたので、商品に手を付けるようだと追い払うのかもしれない。ニホンザルに比べて人との位置的距離や関係性が近いと感じる。サルが移動した先の小学校ではサルに対して学童が BB

弾を撃っていた。執拗に追いかけるようなことは特にしない。道路わきにいるサルたちも私が近づいてもそれほど逃げるそぶりはない。



写真1 商店前の車の上で休むアカゲザル



写真2 公園のブランコでまどろむアカゲザルの親子

その後、寺院を二カ所回った。一カ所目はワットマハー サマナーラーム ラーチャ ウォラウィハーン。ここもサルが寺院の敷地内にいる。バナナを持った年配の女性がやってきて、サルにバナナを与える。タイではこれが普通らしい。木にはマングローになっているがまだ時期が早いようだ。



写真3 地域の人が手渡しでバナナをあげている



写真4 もらったバナナを食べるアカゲザル

二カ所目のワットカオタキアップに移動する。海岸の縁にある小さな緑地の中にある寺院である。ここは欧米人の観光客に人気の場所らしい。サルは寺院周辺とそこまでの道によく出没するらしい。ここでも岩山を中心にサルが生息している。寺院ではサルたちはのんびり過ごしており、犬との距離も近い。人が利用するトイレや家がフェンスで囲まれ、サルが入らないようにされているのが特徴的だった。お土産屋で売っている食べ物をサルが持って行くということで、少しその周辺で様子を見ることにした。お土産屋の屋根に上り様子をうかがっている。店では魚介類が売られており、店から持っていくタイミングをうかがっているようだ。



写真5 寺院の日陰で休むアカゲザルたち



写真6 犬との距離はとても近い



写真7 サルが公衆トイレに入らないように柵で囲われている



写真8 土産物店の屋根の上で店のものを奪うタイミングをうかがっている

翌日にベニガオザルの生息地を訪れた。ここはベニガオザルの保護区になっている。現在この周辺には5群が生息しているとのこと。群れ間の距離が非常に近く、岩場を背後に持つ寺院を中心に生息している。私が行った時には寺院の建物で直射日光を避けるように休んでいる群れがいた。また、保護区では住民による餌付けが不定期に行われている。私がいる間にもバイクのサイドカーにいっぱい積まれたバナナやパパイヤ等を撒きに来ていた。多くのサルがそれを食べ、一つの群れが概ね食べ終わると隣で待っていた次の群れが食べるという状況。繁殖率がとても高くなっているようだ。



写真9 寺院の日陰で休むベニガオザル

この保護区のすぐそばにはキャッサバ畑があり、最近ベニガオザルにより芋を掘り返されるという被害が多くなってきているようだ。この場所でベニガオザルの研究をしている日本人研究者がコーディネートしてくれて、キャッサバ畑の管理者とタイの野生保護局の職員と一緒に畑を回る機会を得た。

ここは近年森林から農地に転換した土地らしい。森林で持っている土地には税金がかけられるという政策ができたようで、農地に変えるところが多いようである。キャッサバ畑の周辺長は約1km程度あり、その周囲をインターネットで購入した電気柵を農家の人が自ら設置しているとのことであった。柵の下段は金網で、上段は5段～8段の



写真11 子供のベニガオザルは色が白い



写真10 ベニガオザルもサルを警戒することはない



写真12 地域の人がバイクで大量のバナナを撒き、それに群がるベニガオザルの群れ

電気柵となっていた。電圧がとても弱く私が触ってもほとんど感じないくらいだった。話を聞いたところ、農家の人はサルを殺したくないので電圧をとても弱くしているとのことであった。しかしとてもサルが恐れるような柵にはなっていないので、電気の効果は現在のところほとんどないといえる。また、未完成とのことではあったが、出入りができる場所や金網の下が開いている場所、電気柵が電柱や木に隣接し上っては入れる場所等があり、改善点は多く見られた。しかし、タイの国民性や宗教の要素もあり、農地の縁にある作物は食べられてもいいと思っているところもありそうだ。しかし、先ほどの餌付け場所とこの農地との距離はほとんどないため、餌付けによる餌がもら

えない時には、すぐ横にあるこのキャッサバ畑に出てくる可能性は高そうだ。それでいてサルを殺したくないというから、この場所でのサル管理はとても難しい。対策の前に餌付けをすると何が起るのかを理解してもらう必要がある。

タイのこういった現状をみると、30年前の日本と同じようなことが起こっているように思えた。タイの文化や地域の人たちの生活は日本のそれとは全く異なるが、野生動物による被害を防ぐ方法や日本でどんな試行錯誤が行われてきたのかを知ることが、タイの人たちのヒントになるのかもしれない。



写真 13 農家の人、環境省の人と被害農地を視察



写真 14 電気柵の周りを見て回る

海外研修報告～マレーシアにおける野生動物管理～

小林 祥 (WMO)

WMO は、野生動物保護管理に貢献する上で必要な情報収集及び技術の取得を目的として、自主的な企画に基づく海外研修制度を設けています。私は本制度を利用し、2023 年 8 月にマレーシアに行く機会を頂きました。今回、東京都立大学とマレーシア工科大学の合同調査に同行させていただき、ジョホール州とサラワク州の国立公園や現地の森林局を訪問して来ました。

○海外研修制度利用のきっかけ

人と野生動物が共存していくためにはどうしたらいいのか。野生動物管理に関わる人ならだれでも考えたことがあるかと思います。私にとっては、この問いについて自分なりの答えを追求し、実現していくことが目標の一つであり、仕事のモチベーションにもなっています。今回、社内の海外研修に応募するに至ったのもこの問いの答えに少しでも近づけないかと思ったからです。

私が人と野生動物の共存について、考えるようになったのは学生時代からです。私は学生時代、マレーシアの熱帯雨林を研究対象地として、野生動物の研究を行っていました。熱帯雨林は、野生生物の宝庫といわれ、陸地の 7 % を覆っているに過ぎませんが、地球上の生物の 50～80 % が生存すると推定されています。しかし、近年は開発による森林伐採や密猟により、多くの野生動物が絶滅の危機に瀕している状態です。学部 4 年の時、野生動物の知識も全くない状態でマレーシアに飛び込んだ私ではありましたが、熱帯雨林に魅せられ、そこに住む野生動物を絶滅させたくない、守りたいと強く思いました。当時の私は、野生動物の生

息地を人間活動から守る、希少種を密猟から守るといった保全の側面でしか見ていませんでした。

大学卒業後、WMO に入社し、野生動物の管理について初めて知ることになります。増加するシカの個体数、サルやイノシシによる農作物被害など、日本では野生動物を管理し、調整していく側面が強いと思います。そして、入社後の 2 年間で糞塊密度調査やサルのカウント調査などのモニタリング、シカの個体数調整、複数機関をまたぐ広域管理体制の構築など、様々な業務に携わるなかで、マレーシアでの野生動物管理はどうなっているのか、マレーシアのフィールドを再び見てみたいと思うようになりました。日本の野生動物管理を日々学んでいる私ですが、心の中には常にマレーシアがあったのです。そして有り難いことに再度マレーシアを訪れる機会を頂きました。

○ジョホール州・エンダウ・ロンピン国立公園

最初にジョホール州にあるエンダウ・ロンピン国立公園を訪問しました。マレー半島の中でも 2 番目に大きな国立公園であり、トラやヒョウ、ウンピョウなどの大型の食肉目、アジアゾウやマレーバクなどの有蹄類、シロテテナガザルやリーフモンキーなどの霊長類など、24 種の絶滅危惧種を含む 150 種近くの野生哺乳類が生息している熱帯雨林が広がっています。

州都のジョホールバルから国立公園の最寄り町であるカハンまで車で 2 時間半、そこからさらに核心部にあるペタまで 2 時間ほどかかりました。カハンからペタまではアブラヤシのプランテーションの中のダート道をひたすら進んでいきます。

エンダウ・ロンピン国立公園は完全にアブラヤシのプランテーションに囲まれているのです。アブラヤシは食品などに用いられる食用油パームオイルの原材料です。マレーシアはインドネシアと並んでパームオイルの主要生産国であり、大規模なプランテーションが広がっている様はマレーシアの至る所でみられます。1970年以降のプランテーションの急速な開発拡大により熱帯雨林の減少が危惧されてきました。国立公園をはじめとする自然保護地域は熱帯雨林とそこに生息する野生動物の保全に重要な役目を果たしているのです。また、



写真1 国立公園の周囲に広がるアブラヤシのプランテーション

現地の人の話では近年、国立公園内のアジアゾウの個体数が増加しているそうです。というのも開発によって生息地を追われた個体がサンクチュアリである国立公園に集まってきているためです。その為、国立公園周辺の村では人との衝突も発生しているそうです。

国立公園内の宿舎に到着すると、我々を歓迎してくれたかのようにリーフモンキーの群れが宿舎のすぐ横の木々にやってきました。霊長類やリス科などの樹上性の哺乳類は、熱帯雨林において比較的簡単に観察することができます。



写真2 船に乗って森へ
現地の先住民オランアスリがガイドとして案内をしてくれた。



写真3 ネイチャートレイル



写真4 アジアゾウの糞

国立公園内でのメインのアクティビティはジャングルトレッキングです。30m 以上もあるような巨木から 1m ほどの低木まで空間すべてを植物が繁茂している文字通り「密林」を歩きます。野生の哺乳類を直接見る機会こそなかったのですが、ゾウの糞がごろごろ転がっていたり、カワウソの足跡があつたりと見どころがたくさんありました。公園内のトレッキングにはガイドの同行が義務付けられていますが、ガイドは現地の先住民族であるオランアスリの人々が担っています。オランアスリは元々、マレーシアの森林に住み狩猟をして暮らしていた民族でした。しかし、国立公園内の指定によって、先祖の土地を奪われ、狩猟等が制限させられたことで、国との対立があったそうです。国立公園ではオランアスリにガイドを担ってもらうことで、彼らにお金を落ちるようにしています。また、古くから森で暮らしてきた彼らの文化や工芸品はエコツーリズムの要素にもなっています。

○サラワク州・バコ国立公園

研修の後半では、ジョホールバルから飛行機で約 1 時間 30 分の距離にある、ボルネオ島北西部のサラワク州の州都クチンを訪れました。ボルネオ島はマレー半島とフィリピンの中に位置する世界で 3 番目に大きな島で、マレー半島と同様に広大な熱帯雨林が広がっています。しかし、動物相は異なり、野生のオランウータンが生息するのはボルネオ島だけです。

今回、サラワク州森林局（Sarawak Forestry Corporation: SFC）の方に案内してもらい、州で最も古くに設立されたバコ国立公園を訪れました。SFC はサラワク州の 47 の国立公園を含む 67 の自然保護地を管理しています。バコ国立公園では、熱帯雨林やマングローブ林、数多くの奇岩が乱立する浸食地形の海岸など多様な景観が楽しめるネイチャートレイルが数多くあります。これらのネ

イチャートレイルは比較的歩きやすく、場所によっては綺麗に木道が整備されているのが印象に残りました。というのも、熱帯雨林での主要な観光アクティビティであるジャングルトレッキングは通常、高温多湿の環境ということもあり過酷なものになりがちです。観光客にとって安全で快適なアクティビティを行えるということは、自然観光地において観光客の満足度を上げる重要な視点の 1 つであると思います。

バコ国立公園では半日程度の滞在ではありましたが、ヒゲイノシシ、シルバーリーフモンキー、ヒョケザルの 3 種の野生哺乳類に遭遇しました。驚いたことにこれらの動物は人慣れしておりとても近い距離で観察できました。ヒゲイノシシに限っては、主要な観光拠点の一つであるビジターセンターの裏手を堂々と闊歩しており、人間を気にする素振りもなくお腹を向けて寝ていました。日本の山でイノシシに遭遇した時の緊張感はそこにはなく、なんだか拍子抜けしてしまいました。近くの道際にはイノシシの掘り返しや糞が多く見られましたが、公園を管理している現地の人たちは全く気にしていないようでした。現在、餌付け等はしていないとのことです（過去にはあったらしい）。野生動物を容易に観察することができることは観光資源の一つにはなり得ますが、あまりにも人と野生動物の距離が近いと予期せぬ事故も考えられ注意が必要です。また、実はヒゲイノシシは IUCN のレッドリストで危急種 (VU) に位置付けられている希少な動物でもあります。現在、マレー半島で猛威を振るっているアフリカ豚熱 (ASF) が、国立公園の訪問客を通して持ち込まれることによって、ヒゲイノシシに多大な影響を与える可能性もあるのです。人と野生動物の適切な距離間については、今後考えていかなければならないことだと思います。



写真5 バコ国立公園（サワラク州）
熱帯雨林やマングローブ林など多様な景観が
観られる。



写真6 人慣れしたヒゲイノシシ
観光客が近づいても逃げることはない。

○マレーシアにおける野生動物管理

今回の研修では、マレーシアの野生動物管理に焦点を当て、現地の国立公園や森林局を訪れました。全体を通して感じたのは、国立公園をはじめとした自然保護地域が自然を保護するだけでなく、観光資源としても積極的に活用されているということです。国立公園は地元住民の憩いの場となっており、マラソン大会などのイベントも開催されており、国外の観光客にはシンガポールや欧米からのパッケージツアーも提供されています。観光

は野生動物保全のための資金と動機を提供する強力な手段として機能していると感じました。日本でも同様に、観光資源としての自然を活用することで資金不足の問題に対処できる可能性があると思います。

マレーシアの国立公園では入場料が取られていますが、日本の国立公園ではそのような制度はありません。マレーシアの国立公園はアメリカやカナダの国立公園のように公園当局が所有権など土地の権限を持っています。一方、日本の国立公園は地域性自然公園として指定され、環境省が管理していますが、土地の所有者は国、地方自治体、民間と異なります。このため、日本の国立公園では土地所有者間の利害対立が生じることがあり、物事が進みづらい場合があります。

さらに、マレーシアは日本以上に縦割り社会であると感じました。マレーシアの国立公園は国ではなく州ごとに管理されています。例えばジョホール州の国立公園はジョホール国立公園局 (Johor National Parks Corporation) が管理していますが、州内の自然保護地域の森林はジョホール州森林局 (Johor State Forestry Department) という別の組織が管理しています。そして、州をまたいだ広域管理はあまり進んでいないように感じました。今回訪れたジョホール州のエンダウ・ロンピン国立公園はパハン州との境界に位置していますが、パハン州側は州立公園としてパハン州が管理しています。マレーシアでは行政単位として国の下に州がありますが、州にはスルタンという王様(君主)がおり、州ごとに統治機構や権限が異なるため、管理上の課題が生じる可能性があります。ちなみにエンダウ・ロンピン国立公園はジョホール州のスルタンのお気に入り、園内には専用のシャレー(宿泊施設)がありました。

マレーシアにおいて観光地として自然の利用が進む一方で、人と野生動物の距離感が近すぎる点が気になりました。先に述べたバコ国立公園のよ

うな国立公園内の話だけではありません。特にニホンザルと同じマカク属であるカニクイザルはちょっとした森に面している街中や現地の大学の構内に頻繁に出没し、ごみをあさったり人から食べ



写真7 動物園内の野生のカニクイザル
観光客を威嚇し、食べ物を奪う個体もいる。

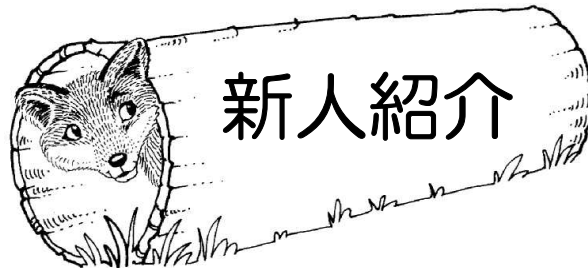
物を奪い取ったりしています。そんな場面でも現地の人々は見慣れたように生活しているのも印象的でした。人と野生動物の距離感が我々日本人とマレーシア人ではっきりと異なっているのだと思います。残念ながら、現地でどのようにカニクイザルの問題に対処しているかはよくわかりませんでした。一部の地域で捕獲を実施しているという話も聞きましたが、管理は上手くいっているのでしょうか。日本でのサル管理のノウハウを導入できるところもあるかもしれません。今後も情報収集していきたいと思っています。

最後に、今回の研修では学生時代に見てきたマレーシアとはまた違った側面を感じることができました。WMOで日本の野生動物管理に従事してきた数年間が私自身のものの見方を変えたことを実感しました。そして、何より私は野生動物が好きであり、また野生動物管理という仕事が好きであることを再確認できたことを嬉しく思います。

表紙の絵

そろそろ角でも落として年度末を迎えるかな。
あ～肩こった。

大西 勝博 (WMO)



◆ 神田 有香音（計画策定支援室） ◆

みなさま、はじめまして。本年度から計画策定支援室に配属されました神田有香音（かんだ あかね）と申します。好きなものは生物全般、ネギ、ラーメン、フィルムカメラ、ゲーム、英語（勉強中）です。どうぞよろしくお願いいたします。

私が自然に興味を持つきっかけとなったのは幼稚園でした。通っていた幼稚園の敷地内には小川と沼、山があり、小川にはアカハライモリやサワガニ、沼にはカメやザリガニが生息しており、秋になると山にはドングリやクリ、紅葉したモミジなどが地面にいっぱい落ちているようなとても自然豊かな環境でした。特に私の人生を変えたのは園長先生の存在でした。園長先生はもともと海洋生物の研究をされていた方で、自然や生物に関する知識を多く持っていらっしゃいました。園長先生は私にマムシの捕獲・ホルマリン漬けを見せてくださったり、一緒に川に入って生き物を捕まえたり、山でシイの実を拾ったりと様々な経験をさせてくれました。そのころから漠然と動物や自然関係の職業に就きたいと思うようになりました。その後、小学校から高校にかけても一貫して生き物が大好きで、飼育されている動物よりも私にとってより身近だった野生動物の研究をしたいと思い、日本大学生物資源科学部に進学しました。

大学では外来種に関する研究をメインに行ってきました。もともとは野生動物の再導入による生物多様性の回復というテーマに興味を持っていましたが、哺乳類の再導入には長い年月がかかることから現実的に厳しかったため、別の地域から導入された動物、つまり“外来種”を対象に研究を行うことにしました。また、私が所属していた研

究室は大量の自動撮影カメラを所持していることに加え、統計解析に長けている先生と先輩がいらっしまったことから、これらの強みを活かした外来種の研究を行いたいと考えました。学部ではハクビシン、アライグマ、クリハラリスによる在来鳥類の卵への捕食圧を自動撮影カメラと統計モデルを用いて定量化しました。大学院ではよりスケールが大きい研究をしたいという思いから、研究室のメインの調査地である千葉県房総半島でニホンジカ、キョン、ニホンノウサギの密度の4年間の時間変動を状態空間RESTモデルを用いて明らかにしました。これらの研究を通じて、技術的な面だけでなく、人とのコミュニケーション、大人数で行う調査のマネジメント能力など人として大きく成長することができました。

研究活動を行う中で、自分の技術や知識を野生動物の管理や保全に活かすことができる職に就きたいと強く思うようになりました。また、様々な野生動物調査のアルバイトに参加した際に、現場で働かれている方々の仕事に対する熱量に魅了され、この業界に入ることを決めました。WMOは社員一人一人が自立していて、新しいことに積極的に挑戦する印象があります。私もその一員とし



て現状にとどまることなく、様々な分野の仕事に挑戦していきたいです。初めのうちはご迷惑をおかけしてしまうこともあるかもしれませんが、一生懸命頑張りますので、どうぞご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

◆ 松井 裕美（計画策定支援室） ◆

皆様、初めまして。今年度より計画策定支援室の事務員として入社いたしました、松井裕美と申します。

趣味は、動物園やアニマルカフェに行く事、漫画やアニメも好きで、その影響でロードバイクを購入してサイクリングを楽しんだりしています。とはいえ、体力が乏しく、あまり長距離を走れないので、現在テニス教室に通って体力作りに励んでいます。

生まれは北海道札幌ですが、小学生の頃から八王子で育ちました。幼少期より生き物や自然が好きで、昆虫、脊椎動物問わず常に何かしらの生物が家にいます。高尾山でクワガタを捕ったり近所の浅川ではドジョウを捕まえたりして飼育していました。

中央大学に進学した理由も、自然あふれる多摩キャンパスであった事と近くに多摩動物公園があった事が大きな要因でした。学部は経済学部でしたが、馬術部に所属し、ゼミでは、ウーパールーパーを使用した変態実験をし、動物に囲まれたキャンパスライフを満喫していました。残念ながら、私の代では、上手く変態はできなかったのですが、引継ぎを行った後輩の代で実験を成功させました。実験で飼育していた時の名残もあって、別個体となりますが、現在、我が家ではウーパールーパーを 10 匹飼育しています。過剰な繁殖や共食いを避けるため、小分けにして飼育しているので、お世話が大変な面もありますが、かわいい彼らに癒されています。

大学卒業後は、市内のシール印刷会社にて、約 13 年働いておりまして、営業事務を中心に総務業

務や入金管理、EC サイト運営等の業務を行ってまいりました。やりがいのある仕事ではありましたが、2024 年に年女となり、今後の人生を考えていった際に「人生一度きりなので、好きな物（動物や自然）にかかわる仕事がしたいな」と思うようになり転職を決意いたしました。そのような時に WMO の求人を見て「社名だけでもワクワクする！ロゴの頭骸骨はなんの動物だろう？」と一目ぼれのような状態で興味を持ち、募集内容も事務員との事でしたので、これまでのスキルを活かせるのではないかと思います。応募いたしました。そのため、面接した日に内定のご連絡をいただいた時は本当に驚き、思わず「お返事にお時間いただけますか」と言ってしまうしました。数日冷静期間を設け、改めて WMO で働きたいという気持ちが自分の中で強い事を認識し、入社希望の旨、お返事をさせていただきました。

初めて本社に足を踏み入れた際に、トイレのマークが鹿で表示されている事や書庫に多数の資料・文献があるのを見て、社内にいるだけでも心が躍ると思うのと同時に、動物や植物好きな方が沢山いらっしゃる、お話を聞くだけで大変興味深く学びが多い素敵な職場だと感じております。畑違いな部分もあり、基本的な事も知らずご迷惑をおかけする事があるかと存じますが、皆様の現場調査や、その後の解析業務、費用清算等がスムーズに行えるよう日々の業務に邁進してまいりたいと存じますので、ご指導、ご鞭撻のほど、何卒、よろしくお願い申し上げます。



◆ 鉄谷 龍之（本社調査事業部） ◆

今年度から本社調査事業部に配属になりました、鉄谷龍之（てつやたつゆき）と申します。昨年度までは福島県で避難地域鳥獣対策支援員（以下、福島支援員）として、5年間勤務していました。所属は変わりましたが、今後ともよろしくお願いいたします。

出身は東京都の多摩地域、都心のベッドタウンである住宅地が広がっており、あまり自然と関わらなかった幼少期だったと思います。高校の進路を選ぶときに興味のあることを聞かれ、「野生動物」という答えをひねり出したときは、それを仕事にするとは考えていませんでした。

その後、野生動物を扱う研究室のある東京農工大学の付属高校に入学し、付属高校のお情けで大学に進学し、くじ引きで野生動物学研究室に入りました。

神奈川にある東京農工大学農学部に進学し、研究室に入った3年生のときは本当に知識がなく、この頃ようやく、丹沢山地にはニホンジカがいっぱいいて、いろいろな被害が出ているという話を聞きました。それに驚き、自分が身近な自然のことを何も知らないこと、そして、多くの人も知らないだろうということを知りました。

研究室の実習や先輩の調査に片っ端から参加する中で、哺乳類だけでなく、生物全般に対する興味が強くなっていきました。このあたりで、やっ

と「生き物好き」になったと思います。それと同時に、人と野生動物の関係が気になるようになりました。結果、卒論のテーマとして、ニホンジカの生態研究ではなく、ニホンジカを防ぐための広域獣害防止柵の研究を選びました。その後、修士では、アムールハリネズミの生息状況や対策についての研究を行いました。特定外来生物でありながら非常にマイナーで、学会等でも「いるの？」と言われていました。

大学院を卒業し、職を転々としながら（国立公園自然保護官事務所、国定公園ビジターセンター、県庁、市立博物館 etc.）、人と野生動物の関係を考える中で、地域という言葉が気になるようになりました。身近な自然との付き合い方を考えるとき、鳥獣被害対策を行うとき、地域というものはとても重要だと思います。そんなとき、福島支援員の募集にある「鳥獣被害対策を支援し、地域コミュニティを再構築する」という言葉を見て、応募を決めました。ここでは業務内容等について記述しませんが、現在も避難指示が解除されない場所、帰還者が少ない場所がある状況で、地域住民、市町村、県と相談しながら、対策を支援できた経験は非常に有意義だったと思います。

今年度から本社所属になりましたが、引き続き福島を中心とした業務になると思います。一方で、所属が変わることで、できることは広がるはずですので、あとは自分の能力の問題かと思います。

改めて精進しますので、よろしくお願いいたします。



背景は除染土壌等の仮仮置場

◆ 島田 駿（本社調査事業部） ◆

はじめまして。本年度から本社調査事業部に配属となりました。島田 駿と申します。よろしくお願いいたします。

出身は佐賀県佐賀市（嘉瀬川や有明海の近く）で、小さい時から近くの公園で生き物を探したり、魚釣りをしたり、ペットのピレネー犬と遊んだり人と人よりも自然が多い環境で育ちました。その結果、高校生の時点で動物にかかわる仕事がしたい、特に動物園の飼育員になりたいという目標ができ、北里大学の獣医学部生物環境科学科に進学しました。

大学で動物園の飼育員実習に何度も参加していく中、長年飼育を担当してきた職員の方でも野生動物（特に猛獣）に威嚇されたり、実際にあった事故例を聞いていくうちに人と野生動物との距離感について疑問が出始めました。そして、卒業研究でニホンジカの獣害に対する担い手（県、市町村職員と猟友会員）の意識調査を行いました。農家の皆様から聞いた被害の実情や現場の視察から人と野生動物の間で起こる問題をどうにかしたいという考えに変わり、卒業後は神奈川県で鳥獣被害対策専門員を7年間、副業で愛川町のニホンザルを対象とした鳥獣監視員を6年間勤めました。

神奈川県では担当になった地域の市町村や住民の方へ講習会の講師や対策全般のアドバイスと実演を行ったほか、動物の調査、追い払い、捕獲、放獣、解体、柵設置、集落環境調査から整備も行いました。ニホンザルは神奈川県の中でも加害性の高い群れ（小田原市や湯河原町）を主に担当していました。鳥獣監視員の業務では宮ヶ瀬湖から厚木周辺の群れについて監視、追い払いを行っていました。本社の皆様とはツキノワグマの放獣、ニホンザルの首輪装着と放獣等の業務で何度かご一緒させていただきました。

行政組織であったため業務範囲は後方からの指示が多く、働いていく中でもっと前面に出て動きたいという思いが強くなり、これまでの業務経験も活かせないかと考え WMO に入社しました。特

に神奈川県のサルについてはかなり業務経験がありますので、早い段階でお役に立てればと思っております。

前職で頼もしい業者であった WMO で働けることができ光栄に思っております。経験を活かしつつ人と野生動物の問題解決に向けて貢献できるよう全力で業務に携わって参りますのでご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



◆ 平川 亮太（本社調査事業部） ◆

初めまして。今年度、本社調査事業部に配属となりました、平川亮太と申します。これから簡単に自己紹介をさせていただきます。

出身は神奈川県横浜市（の田舎）で、高校までこの地で過ごしました。ドリトル先生シリーズや動物のお医者さん、そして齊藤慶輔先生の著書など様々なメディアに（良くも悪くも）感化され、野生動物の獣医師を目指しました。その後、紆余曲折あったものの、日本獣医生命科学大学の獣医学科に入学しました。大学在学中は3年次から野生動物学研究室に所属していました。後述する卒業研究に関する調査や、各種動物の捕獲や解剖など様々な調査に赴き、研究室ならではの貴重な経験ができました。その傍ら、獣医学生として動物病院の実習や生産動物（牛や馬など）の実習に参加し、また、アルバイトとして動物病院に勤務していました。

卒業研究では、獣医学生としては稀有な生態学的研究を行っていました。具体的には群馬県で自動撮影カメラを用いたニホンジカの生息密度推定

を行っていました。調査地であった群馬県吾妻郡嬭恋村は夏秋キャベツの一大産地です。しかし、ニホンジカなどの野生動物による農業被害が甚大になっています。対策のための情報の1つとして、そもそもの程度の個体数が存在するのか調べるため、近年注目を集めている REST モデルを実装しました。調査の計画や実行、データ解析を自分の手で行える非常に有益な機会でした（無論、苦労も多かったが…）。

以上のように、様々な動物とそれらに関連する課題を学んできましたが、中でも魅力的だったのは野生動物に関する問題です。大学入学当初は希少種の救護に興味がありましたが、研究室ではとりわけ野生動物の管理について学ぶ機会が多く、現在も大きな課題の1つである管理が希少種にも多大なる影響を及ぼすことを知り、この分野に傾倒するようになりました。より卓越した知識と技術を得て、人と野生動物の軋轢を少しでも軽減したいという目的から、入社することを決意しました。

まだ知識も経験も少ないですが、上述の目的のために日々精進いたしますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



昨年の哺乳類学会の後、西表島にイリオモテヤマネコを探しに行きました。やっと見つけた1頭。

◆ 鳥山 哲（本社調査事業部） ◆

はじめまして。本年度から非常勤として本社調査事業部に配属されました鳥山哲と申します。よろしくお願いします。生まれは北海道の帯広市ですが、父の仕事の都合で計7回の引っ越しののち、千葉県八千代市に落ち着きました。小さい時から体を動かすのが好きで、中学と高校は野球部でエネルギーを発散してきました。その後一浪ののち茨城大学人文学部へと入学し、江戸時代の歴史について学んできました。入学してすぐに 50 cc の原付バイクを手に入れ、日本各地に出かけると親切(?)なおじさんが家に泊めてくれたり、名物の美味しいものを食べたり、自由な旅を満喫してきましたが、お金を使って旅をすることに何か物足りなさを感じていました。しかし具体的な発散方法も思いつかないまま、モヤモヤと大学生活を送っていました。ある日、研究で地元のお寺のことを調べていると、とある仏教書籍で「木喰」という、文字通り殺生を禁じ、木の実や果実のみを食べて生活するお坊さんの修行方法を見つけました。その記述を見た瞬間に感動しました。「人ってドングリだけで生きていけるんだ！」

大学を卒業して都市ガス会社に就職し、設備課に配属となり、給湯器やエアコンの設置補助などをしていました。働きながらも木喰の旅に憧れていましたが、一方で現実的に無理だろうという諦めのような気持ちもありました。果たしてドングリで必要カロリーは摂取できるのか、ドングリ以外の食べ物はどうするのかなど、また「食べられる野草図鑑」のようなものを買ったものの、ノビルとそこら辺に生えている草の何が違うのかさえも分からず、本棚で埃をかぶっているような始末でした。ある日、友達にこの中途半端な現状を話してみると、「いつまで社会の犬なんだ？鳥山なんだから飛べよ」と言われました。会社を辞めて旅に出ました。そこから沢山失敗して、妥協したところも大いにありましたが、お金を持たない、ドングリ生活、徒歩で日本一周というテーマに沿った旅ができました。



→今の顔



→旅後の顔

未経験の業界ですが社員さんのお話がどれも新鮮で面白く、今までになかった新しい世界が開きつつあるような気がします。一から勉強という形になりますが、素直で丁寧な仕事ができるよう努力していきます。何卒よろしくお願いします。

◆ 井上 莉央南（関西支社） ◆

はじめまして。本年度より関西支社に配属となった井上莉央南と申します。よろしくお願いいたします。

出身は三重県志摩市（伊勢志摩）で、海と山に囲まれた環境で育ちました。家のすぐ裏が山だったので、よく庭の芝生をイノシシが掘り返しに来ていました。幼いころから田んぼや草むらで生き物を観察したり捕まえたりするのが大好きで、田舎を走り回って遊んでいました。また、両親の趣味が山登りだったため、小学生の頃は毎月どこか

の山に登っていました。駒ヶ岳などの日本アルプスの山にも4回登ったことがあります。その時は嫌々登っていましたが、今となっては本当に良い経験をさせてもらっていたなと思います。趣味は旅行です。海外は韓国・バリ島・タイ・台湾・香港に行ったことがあります。そのため、調査で様々な土地に行けることを楽しみにしています。実家では、犬、イシガメ、フクロモモンガを飼っています。カメは後ろをずっと付いてきて足元から這い上がってきますが、モモンガは成体から飼い始めたので懐いていません（それでも可愛いです）。部活はソフトボール（中学）と野球部のマネージャー（高大）をしておりました。定期的にキャッチボールがしたくなるので、相手をしてくれる方がいらっしゃれば声をかけてくださると嬉しいです。

野生動物に関わる仕事がしたいと思ったのは小学3年生の時でした。人間活動の影響で多くの動物が絶滅していていることを知り、とても悲しくなったのがきっかけです。それから15年間、1度も気持ちが変わることはなく野生動物に関わることのできる道を模索してきました。

大学は名古屋にある名城大学農学部に入學し、そのままマスターまで進みました。研究は、二ホンリス（卒論）・アカネズミ（修論）を対象に遺伝分析を行い、都市部による生息地の分断化について調べていました。しかし、私の指導教官の先生は遺伝分析が専門外だったので、研究室には遺伝分析について教えてくれる人が誰もいないという状況でした。そのため、他学科や外部の先生に聞いて回り、試行錯誤をし、DNA分析が成功するまでに大変苦労しました。沢山失敗した分多くの知識を得られたと思います。また、大学院ではGISによる分析も行いました。アカネズミの捕獲は主に河川敷で行いましたが、大台ヶ原などの森林でも調査していました。このように野外調査・遺伝分析・GISと色々なことをやっていたので、特別この分野に詳しいというものはありませんが、多方面から問題を捉えられると思っています。

幼いころからの夢だった仕事に就けてとても嬉

しく思っております。元々希少種に興味があったので、希少種に関わる業務があれば是非参加したいです。また、地元の伊勢志摩も国立公園に指定されているので、業務に関わることができたら嬉しいです。まだ何もできない未熟者ですが、「野生動物を守りたい」という気持ちだけは自信があります。皆様の背中を追いかけて早く一人前になれるよう一生懸命頑張っておりますので、ご指導、ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願いいたします。



ブイクン（♂）



タイガーキングダム（タイ）

◆ 赤松 萌鈴（広島事業所） ◆

はじめまして、広島事業所に配属になりました赤松萌鈴（あかまつ もえり）と申します。よろしくお願いいたします。

私は北海道札幌市に生まれ、小学校入学から高校卒業まで道東の帯広市ですごしました。小中高校と運動部に所属し（野球→ソフトボール→ハンドボール）、なによりも部活動が一番！というよう

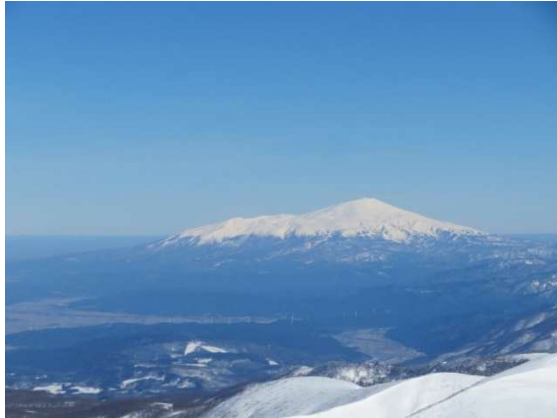
な学生生活でした。そのため、野山で遊ぶようなことは少なく、また幼少期から両親の影響で動物と関わる機会も多かったのですが偏りが大きかったため（主にシカと牛）、北海道ならではの自然環境を肌で感じる機会というのはそこまで多くなかったと感じています。

一方で幼少期から、釧路湿原での夕陽の中に佇む大量のシカたちにはじまり、高速道路上から牛の放牧と思いきやシカ、学校のグラウンドにシカ、人よりもシカが多い温泉街などなど、目にする機会が多い動物はシカであったため私にとっての野生動物＝シカであり、当時はただ身近なかわいい動物という印象でした。

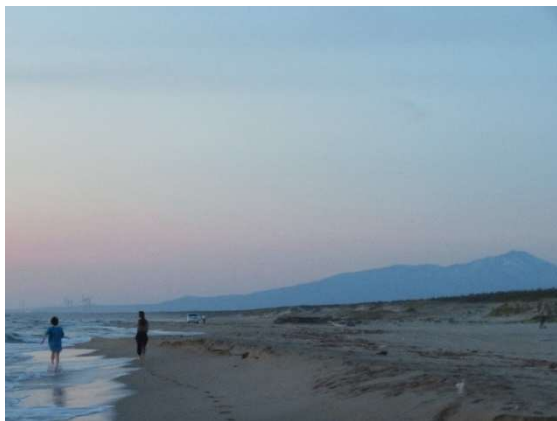
しかし、大きくなるにつれてシカによる被害があるということを知り、なんとかよりよい自然へと格闘する大人たちの姿は大変そうではありつつも、楽しそうでとてもかっこよかったことを覚えています。たびたび目にしたこのような光景が、私が野生動物管理に携わりたいと考えるきっかけであったことは間違いありません。

野生動物についての研究をしたいと考え進学した山形大学では、学部・修士ともに多雪地である福島県南会津町で冬季のシカの生息地選択や採食選択についての研究を行っていました。2～3か月に一度南会津町に滞在し、3月にスキーを使って足跡や採食痕を記録し冬芽の同定を行ったり、夏には毎木調査や下層植生衰退度調査を行っていました。また、修士ではシカに GPS 首輪を装着し、ミクロスケールでのより詳細な生息地選択についての解析も行いました。当調査地における結果としては、餌資源量や年による積雪量の違いにかかわらずシカはとにかく積雪深の浅い場所を利用すること、多雪年では寡雪年に比べ生息適地が減少し採食に占める樹皮剥ぎの割合が増加すること、気温の低下に伴いシカの活動量が減少することなどが明らかになりました。

また、大学ではワンダーフォーゲル部に所属し、新型コロナウイルスの影響により2年間だけの活



月山付近からの鳥海山



走る友人と鳥海山



夕陽と焚火

動でしたが、山形県の山や北アルプス・南アルプスでの縦走を行っていました。さらに大学の同じ科の同期にはアクティブな人が多く、春は鳥海山・月山でのバックカントリースキーや演習林で山菜取り、夏と秋には登山・溪流釣りや海で夕陽を見ながら焚火をし、冬になるとスキー場に通うなど、

さまざまな遊びに連れて行ってもらいました。同期にとっても恵まれ、キャンパスも山形県鶴岡市という海にも山にも近い環境にあったことから、自然の中で遊ぶことを知り、とても充実した学生生活を送ることができました。特に鳥海山は見るのもよし、登るのもよし、滑るのもよしとみんなのお気に入りの山なので、みなさんも機会があればぜひ！

大学生活での研究や遊びを通じて、より野生動物管理や生物多様性の保全にかかわりたいと思い、このたびWMOに入社させていただきました。獣種にとらわれず様々な業務を経験させていただきたいと思っていますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

◆ 海田 喜久枝（関西支社） ◆

初めまして。関西支社で非常勤社員となります海田喜久枝です。関西支社の海田主任研究員の妻です。私は愛媛の田舎で育ち、自然には人並みに触れて育ちましたが、野生動物に関する知識があるわけでもなく、こんな面白い仕事があるなんてことは海田に出会うまで知りませんでした。

ここ数年、作業があるときに声をかけていただいていたバイトとして、画像解析やカレンダー入力、ワクチン摂食判別などをさせていただいていました。

どの作業も新鮮な体験で、楽しんでやっていますが、中でも画像解析は、獣種問わず普段見られない野生動物の動きが見られて本当に大好きな作業です。

4月からは、事務の補助もさせていただく事となりましたので、極力ご迷惑をかけないよう、少しでもお役に立てればと思っています。よろしくお願いします。

神戸には2016年の海田の入社に伴い移り住みました。地元の愛媛を出るのは初めてで、都会暮らしに胸を躍らせましたが、数年すると田舎が恋

しくなり、ドライブの度に、古民家の空き家を探そうになっていました。

子供が2歳になるころ、いいご縁をいただき、会社からそう遠くない田舎で茅葺屋根の古民家に引っ越すことができました。

周りは田んぼと林。10年以上放置された家の周辺ではアライグマやイノシシが頻繁に目撃されると聞き、役に立つかも！と、わな猟免許も取得しました。が、私たちの生活音（親子の叫び声）が

追い払いの役割を果たしているのか？幸か不幸か、いまだペーパー猟師です。

日常的にキジや小綬鶏を見たり、キツネがニワトリを狙いに来たり、アナグマが追いかけてっこをしていたり、そんな野趣感を楽しみながら暮らしております。

最近は、数羽いるニワトリのオスの数が多いので調整するために海田と鶏の捌き方を特訓中です。詳しい方いらっしゃいましたら、ぜひご教授ください。



撮影：海田喜久枝



撮影：海田明裕



撮影：海田明裕



撮影：海田喜久枝

◆ 山崎 耕造（関西支社） ◆

みなさま、はじめまして。本年度から関西支社に配属されました、非常勤社員の山崎耕造と申します。食べることで飲むことが大好き、趣味は読書とハイキングと尺八です。どうぞよろしくお願いいたします。

私が生まれたのは、WMOの本社がある八王子です。もともと、二歳のときに茨城（いばらき）県に引っ越したため、八王子での記憶はほとんどありません。茨城では、鬼怒川、小貝川、利根川といくつもの川に囲まれる水海道市（現常総市）で育ちました。動物が好きな父の影響もあり、博物館や動物園を巡ったり、釣りやキャンプをしたりして過ごしました。また、ボーイスカウトにも所属し、様々な年代の方と野外活動をしたのも良い思い出です。

高校卒業後の進路には悩みましたが、フィールドに出て学べる大学を希望し、東京農工大学農学部地域生態システム学科に進学することとなりました。大学では探検部、狩り部、和楽器サークルに所属し、多様な価値観に接することができました。大学をストレートで卒業しないという人たちにも影響を受けてしまいましたが、人間的な幅は広がった期間だったと信じています。

また、大学内外の人々と関わるうちに、フィールド分野の中でも特に野生動物と関わる仕事がしたいと考えるようになり、二年生の時に同大学の共同獣医学科へ転学科をしました。これは、今後の野生動物の研究や保護管理分野において、一個体から多くの情報を得たり、侵襲的な調査をする中で、獣医師が貢献できる余地が大きいと考えたことによります。

卒業研究は獣医生理学教室で行い、ツキノワグマの皮脂腺について取り組みました。関東で長年行われているクマ調査に参加させていただき、血液や皮膚サンプルを採取し、解析を行いました。調査は夏の暑い時期に行われ、道具を背負って汗をだらだらと流しながら山を登るのは大変でしたが、調査後に拠点で冷たいビールを飲みながら仲

間たちと動物の話をしていた時間は、今でも思い出す幸福な時間です。

しかし、最終学年になるころに covid-19 の世界的流行が発生し、予定していた短期留学や卒論が不完全燃焼のまま大学を卒業することになってしまいました。自由に外出できない生活に嫌気がさしていた私は、卒業後すぐには定職に就かないことを決めました。まずは嫌になるほど外に出たいと考え、山小屋でのアルバイトを選びました。北アルプス立山での生活は不自由なこともありましたが、定点で高山の季節の移り変わりを観察できたことは大変貴重な経験でした。その後は学生時代に関わっていたクマの調査のお手伝いや、WMOや動物園でのアルバイトなどをして過していました。また、短期間ですが千葉の動物病院で犬猫の獣医師として働いていたこともあります。

ふらふらといろいろな環境に身を置いてきた私ですが、常に頭の片隅にあったのは、野生動物と人間が大好きで、両者の関係、また野生動物を介した人間同士の関係が良好であってほしいということです。WMOの方々が持つ理念や情熱、人間性には以前から尊敬の念を抱いており、今回縁があり社員として働かせていただくことになり、大変嬉しく思っています。この先私がどんな方向に向かっていくのか、自分でもまだわかりませんが、まずは目の前のことに全力で取り組みたいと思っています。未熟な身ではありますが、皆様のお役に立てるよう精進していきますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

WMO活動報告 2024年1月～3月

- 箕面国有林におけるシカの生息状況外モニタリング調査委託事業〔近畿中国森林管理局〕
- クマ類の出没に対応する体制構築等業務〔環境省〕
- ニホンジカ及びイノシシの個体数推定等業務〔環境省〕
- 東北地方におけるカワウ広域保護管理協議会企画運営等業務〔東北地方環境事務所〕
- ツキノワグマ人身事故注意喚起チラシ作成業務〔東北地方環境事務所〕
- 尾瀬及び日光国立公園におけるニホンジカ広域対策業務〔関東地方環境事務所〕
- 富士箱根伊豆国立公園箱根地域シカ管理対策検討調査業務〔関東地方環境事務所〕
- 関東山地ニホンジカ広域保護管理調査等業務〔関東地方環境事務所〕
- 富士箱根伊豆国立公園箱根地域植生保護柵試験設置調査業務〔関東地方環境事務所〕
- 国指定紀伊長島鳥獣保護区鳥類生息状況等調査業務〔中部地方環境事務所〕
- 四国のツキノワグマ錯誤捕獲等緊急対応業務（単価契約）〔中国四国地方環境事務所〕
- 中国四国カワウ広域管理指針等評価及び広域協議会等開催業務〔中国四国地方環境事務所〕
- 大山隠岐国立公園大山蒜山地域におけるニホンジカ対策検討業務〔中国四国地方環境事務所〕
- 霧島錦江湾国立公園生態系維持回復事業等に関する派遣業務〔九州地方環境事務所〕
- 避難地域鳥獣対策支援業務〔福島県〕
- 鳥獣被害対策に係る生活環境被害防止モデル事業〔福島県〕
- 生活環境保全のための鳥獣被害対策に係る研修事業業務委託〔福島県〕
- 野生鳥獣年齢査定業務〔福島県環境創造センター〕
- 指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画策定業務〔茨城県〕
- 栃木県シカ・イノシシ個体数推定調査業務委託〔栃木県林業センター〕
- GPS 首輪装着補助〔栃木県林業センター〕
- 福島茨城栃木県境地域ニホンジカ生息状況調査業務委託〔福島茨城栃木連携捕獲協議会〕
- 神津地区ニホンジカ及びイノシシ生息状況等調査業務〔群馬県〕
- 赤城山ニホンジカ及びイノシシ生息状況等調査業務〔群馬県〕
- 群馬県ニホンジカ生息状況調査〔群馬県鳥獣被害対策支援センター〕
- イノシシ・ニホンジカ生息状況調査及び個体数推定業務〔埼玉県〕
- 外来種特別対策事業（アカゲザル等）委託〔千葉県〕
- ニホンザル生息状況調査等業務委託〔千葉県〕
- 大島キョン防除委託 組織銃器A〔東京都〕
- シカ個体群動態等調査委託〔東京都〕
- ツキノワグマ学習放獣等業務委託〔神奈川県〕
- ニホンザル生息状況調査業務委託〔神奈川県〕
- ツキノワグマ DNA 分析による個体識別業務委託〔神奈川県〕
- 公園緑地等維持管理工事 県単（その709）〔神奈川県厚木土木事務所〕
- ニホンジカ生息状況調査業務委託〔神奈川県自然環境保全センター〕
- ニホンジカ管理捕獲従事者育成研修運営業務委託〔神奈川県自然環境保全センター〕
- 木場潟公園（東園地）カモシカ捕獲業務委託〔石川県〕

- 福井県ニホンジカ管理計画モニタリング業務〔福井県〕
- ニホンジカ生息状況等調査業務委託〔山梨県森林総合研究所〕
- ニホンザル GPS 調査等モデル事業業務委託〔岐阜県〕
- ツキノワグマ図上演習実施業務委託〔愛知県〕
- ツキノワグマ保護等業務委託（単価契約）〔三重県〕
- 三重県ニホンザル生息状況調査業務委託〔三重県〕
- ツキノワグマ移動放獣業務委託〔滋賀県〕
- 森林動物行動圏等調査事業業務〔滋賀県〕
- 第一種特定鳥獣保護計画モニタリング調査事業（ツキノワグマ）〔滋賀県〕
- ツキノワグマ保護管理事業〔京都府〕
- 野生鳥獣（ツキノワグマ）生息動態調査業務〔京都府〕
- 野生鳥獣（イノシシ・ニホンジカ・ニホンザル）生息動態調査業務〔京都府〕
- ニホンザル生息状況調査〔京都府中丹広域振興局〕
- ニホンザル被害防止対策に係る山城A・B群サル生息動態調査及びGPS回収業務
〔京都府山城広域振興局〕
- カワウ管理計画策定及び管理手法実証業務〔兵庫県〕
- ツキノワグマ放獣業務委託〔兵庫県森林動物研究センター〕
- シカ・イノシシ被害対策効率捕獲業務におけるシカ捕獲・GPS発信器首輪装着業務
〔兵庫県森林動物研究センター〕
- シカ・イノシシ分布拡大地域におけるGPS追跡による捕獲効率向上調査に係る
シカ捕獲・GPS装着業務〔兵庫県森林動物研究センター〕
- 捕獲檻 ニホンザル電波発信機およびGPS首輪装着業務委託〔兵庫県森林動物研究センター〕
- ツキノワグマ放獣業務委託〔奈良県〕
- 奈良県ニホンザル生息状況調査業務〔奈良県〕
- イノシシ生息状況調査業務〔奈良県〕
- 和歌山県ツキノワグマ保護管理対策業務〔和歌山県〕
- 有害ニホンザルの群れ捕獲業務〔和歌山県〕
- ニホンザルの生息状況調査（GPSを活用した群れ調査）業務〔和歌山県〕
- クリハラリス生息状況調査委託業務〔和歌山県〕
- ツキノワグマ放獣業務〔鳥取県〕
- 特定鳥獣生息実態調査業務〔鳥取県〕
- 指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画策定調査業務〔鳥取県〕
- 日野地域ニホンジカ生息状況・森林衰退度調査及び捕獲技術研修業務〔鳥取県〕
- カワウ捕獲・被害抑制対策業務〔鳥取県鳥獣対策センター〕
- シカ糞塊密度調査の技術研修業務〔島根県〕
- ツキノワグマ不動態業務委託事業〔岡山県〕
- 野生鳥獣調査事業（サル生息状況調査（個体数調査業務））〔岡山県〕
- 野生鳥獣調査事業（ニホンジカ、イノシシの生息数推定業務）〔岡山県〕
- ツキノワグマGPS行動追跡調査委託業務〔岡山県〕
- 岡山県カワウ被害防止総合対策事業〔岡山県〕

- 広島県ニホンジカ林業被害実態調査等分析業務〔広島県〕
- 特定鳥獣等生息状況モニタリング調査・分析等業務〔広島県〕
- 広島県鳥獣被害対策に係る集落実態調査・入力・分析・分析ツール作成業務〔広島県〕
- 野生鳥獣市街地等出没対策マニュアル作成業務〔広島県〕
- 鳥獣被害対策アドバイザー支援業務〔山口県〕
- ニホンジカ個体数推定業務及び生息状況調査〔山口県〕
- ニホンザル対策強化事業〔徳島県〕
- 効果的捕獲促進事業〔徳島県〕
- 徳島県指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画策定等支援業務〔徳島県〕
- 鳥獣被害対策指導員養成業務〔徳島県〕
- ニホンジカ生息状況モニタリング解析業務〔徳島県〕
- ニホンジカ生息状況モニタリング調査業務〔徳島県〕
- シカによる森林被害緊急対策事業委託業務〔愛媛県〕
- 指定管理鳥獣（ニホンジカ）捕獲等業務〔石鎚山系〕〔愛媛県〕
- 愛媛県ニホンザル生息状況等調査業務〔愛媛県〕
- サル被害総合対策普及事業委託業務〔高知県〕
- 福岡県指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画基礎調査及び評価業務〔福岡県〕
- 対馬のニホンジカ生息密度等調査及び指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画案作成業務〔長崎県〕
- かんしょ産地サル被害対策実証事業 ニホンザル生息状況調査委託業務〔大分県中部振興局〕
- 指定管理鳥獣捕獲等事業【実施計画の策定】業務委託〔鹿児島県〕
- ニホンザル発信機装着業務委託〔東京都八王子市〕
- 警戒システム発信器装着業務委託〔東京都奥多摩町〕
- ツキノワグマ緊急対策事業に関する委託（錯誤捕獲対応）〔東京都奥多摩町〕
- タイワンザル生態調査および計画策定委託〔東京都大島町〕
- クリハラリス生態調査および計画策定委託〔東京都大島町〕
- 静岡市ニホンザル行動圏把握調査業務〔静岡県静岡市〕
- ニホンザル甲賀B群個体数調整業務委託〔滋賀県甲賀市〕
- ニホンザル有害捕獲業務委託〔滋賀県甲賀市〕
- ニホンザル甲賀A群加害レベル判定調査業務委託〔滋賀県甲賀市〕
- ニホンザル信楽A群発信器装着業務委託〔滋賀県甲賀市〕
- ニホンザル甲賀C群発信器装着業務委託〔滋賀県甲賀市〕
- ニホンザル新旭A2群個体数調整業務委託〔滋賀県高島市〕
- ニホンザル個体数調整業務〔滋賀県東近江市〕
- 安全講習会講師派遣業務〔滋賀県米原市〕
- ニホンザルモニタリング調査業務〔滋賀県日野町〕
- 愛荘町ニホンザル個体数調整業務委託（甲良B群）〔滋賀県愛荘町〕
- 甲良町ニホンザル個体数調整推進事業委託（個体数調整）〔滋賀県甲良町〕
- ニホンザル個体数調整業務委託〔滋賀県多賀町〕
- 総合獣害対策事業東山地域イノシシ等大型獣対策業務〔京都府京都市〕
- 総合獣害対策事業ニホンザル（京都A群）捕獲等管理業務〔京都府京都市〕

- 総合獣害対策事業久多ニホンザル（京都D群）捕獲等管理業務〔京都府京都市〕
- 総合獣害対策事業ニホンザル（亀岡A群）管理業務〔京都府京都市〕
- ニホンザル発信器装着業務〔京都府伊根町〕
- ニホンヅカによる生態系等への影響調査業務〔兵庫県神戸市〕
- ニホンザル有害鳥獣捕獲業務〔和歌山県御坊市〕
- ニホンザル有害鳥獣捕獲業務〔和歌山県日高町〕
- ツキノワグマ有害捕獲個体処理委託業務〔鳥取県若桜町〕
- ツキノワグマ有害捕獲個体処理委託業務〔鳥取県八頭町〕
- 天然記念物臥牛山のサル生息地 天然記念物食害対策事業 ニホンザル個体数変動シミュレーション業務
〔高梁市教育委員会〕
- 天然記念物臥牛山のサル生息地 天然記念物食害対策事業 ニホンザル発信機装着業務
〔高梁市教育委員会〕
- サル被害総合対策モデル事業〔岡山県真庭市〕
- ニホンザル捕獲業務〔岡山県真庭市〕
- ニホンザル捕獲業務委託〔広島県廿日市市〕
- ニホンザル等被害対策研修業務委託（小鯖地域及び宮野地域）〔山口県山口市〕
- ニホンザル等被害対策研修業務委託（仁保地域）〔山口県山口市〕
- つるぎ町ニホンザル捕獲駆除業務〔徳島県つるぎ町〕
- 有害鳥獣捕獲業務委託〔福岡県那珂川市〕
- 市街地におけるハナレザル被害対策業務委託〔福岡県那珂川市〕
- ニホンザル生息状況調査業務委託〔川俣町農林産物有害鳥獣対策協議会〕
- 鳥獣被害防止総合対策交付金 ニホンザル生息状況等調査業務〔南房総市有害鳥獣対策協議会〕
- ニホンザル発信器装着業務〔君津市野生猿鹿猪等被害対策協議会〕
- 福井市サル群れ調査業務（福井A群 GPS ダウンロード・解析）〔福井市鳥獣害対策協議会〕
- 福井市サル群れ調査業務（福井B群）〔福井市鳥獣害対策協議会〕
- 鳥獣害のない里づくり推進事業ニホンザルモニタリング及び選択捕獲業務〔大野市鳥獣害対策協議会〕
- 鯖江市ニホンザル複合対策業務（有害捕獲及び発信器装着）〔鯖江市鳥獣害対策協議会〕
- 鯖江市ニホンザル選択捕獲業務〔鯖江市鳥獣害対策協議会〕
- ニホンザル有害捕獲業務〔越前市鳥獣対策協議会〕
- ニホンザル有害鳥獣捕獲業務委託〔池田町総合農政推進協議会〕
- 南越前町ニホンザル生息状況調査業務〔南越前町鳥獣害対策協議会〕
- 越前町ニホンザル捕獲等業務〔越前町鳥獣害対策協議会〕
- 野生いのしし経口ワクチン野外散布に係る統括業務委託〔岐阜県経口ワクチン対策協議会〕
- ニホンザル生息状況調査等業務〔揖斐川町鳥獣被害対策協議会〕
- 静岡市ニホンザル生息状況調査（カウント調査）業務〔静岡市野生動物被害対策研究協議会〕
- ニホンザル個体数・行動域調査業務委託（安曇川B群）〔滋賀県西部・南部地域鳥獣被害対策協議会〕
- ニホンザル加害群調査業務〔東近江市野生動物保護管理対策協議会〕
- ニホンザル土山A群発信器装着業務委託〔甲賀地域獣害対策協議会〕
- ニホンザル群れ移動追跡用発信機装着業務委託〔湖東地域広域鳥獣害防止対策検討会議〕
- ニホンザル（舞鶴E群）生息状況モニタリング調査業務〔舞鶴市有害鳥獣被害防止対策協議会〕

- 大丹波地域ニホンザル篠山B群（園部A群）発信器装着業務〔大丹波地域サル対策広域協議会〕
- 川本町鳥獣被害防止総合支援事業被害防除業務〔川本町有害鳥獣被害対策協議会〕
- ニホンザル GPS 首輪等装着業務〔高梁市鳥獣被害防止対策協議会〕
- ニホンザル生息状況調査業務〔福山市鳥獣被害対策協議会〕
- ニホンザル生息状況調査業務委託〔福山市鳥獣被害対策協議会〕
- ニホンザル生息状況等調査業務〔那賀町鳥獣被害対策協議会〕
- ニホンザル GPS 首輪装着業務〔大阪大学〕
- 自動撮影カメラによるシカ生息密度推定業務〔京都先端科学大学〕
- 第2期野生イノシシ経口ワクチン野外散布実施業務委託〔一般社団法人神奈川県畜産会〕
- ニホンザル生息状況調査業務〔特定非営利活動法人里地里山問題研究所〕
- 鳥獣業務管理システム使用及び運用支援等業務〔一般財団法人自然環境研究センター〕
- 加美町ツキノワグマ捕獲追跡調査業務（2023年8月～2024年3月）〔一般財団法人日本気象協会〕
- 高宕山自然動物園ニホンザル個体管理業務〔合同会社猴森〕
- 地域リーダー（森林）及び鳥獣被害対策コーディネーター育成研修事業における教材改訂及び
研修会開催・講師等（委託）〔株式会社野生鳥獣対策連携センター〕
- ニホンザル2群に対する集団捕獲業務〔Wildlife Service〕
- イノシシ広域被害対策事業に係るモニタリング調査等業務〔ワイルドライフ・サポート HARU〕
- 左京区獣害対策チーム連絡協議会研修会…………… 講師：海老原
- 令和5年度南丹地域ニホンザル被害対策会議…………… 講師：海老原
- 有害鳥獣（イノシシ）被害対策講演会（福山市）…………… 講師：檀上
- サル被害対策講演会（福山市）…………… 講師：檀上
- 廿日市市における鳥獣対策講習会（廿日市市）…………… 講師：檀上
- 有害鳥獣の市街地出没対策に係る研修会（佐賀県）…………… 講師：清野
- 野生動物市街地出没対策研修会（長崎県）…………… 講師：清野
- カワウ保護及び管理に関する検討会（環境省）…………… 検討委員：加藤(洋)
- ニホンジカの保護及び管理に関する検討会（環境省）…………… 検討委員：濱崎
- ニホンザルの保護及び管理に関する検討会（環境省）…………… 検討委員：清野
- 屋久島世界遺産地域科学委員会ヤクシカ・ワーキンググループ…………… 委員：濱崎
- ICT 等の新技術の普及推進に係る意見交換会検討委員会（農林水産省）…………… 委員：清野
- 福島県野生鳥獣保護管理検討会…………… 委員：濱崎
- 東京都シカ管理計画検討会…………… 委員：岸本(真)
- 神奈川県ニホンザル管理検討委員会…………… オブザーバー：岡野・海老原・豊川
- 山梨県イノシシ・ツキノワグマ保護管理会議…………… オブザーバー：奥村
- 静岡県カモシカ管理検討会…………… 委員：濱崎
- 静岡県ニホンジカ保護管理検討会…………… 委員：濱崎
- 静岡県カワウ食害防止対策検討会…………… 委員：加藤(洋)
- 滋賀県ニホンザル第二種特定鳥獣管理計画検討会…………… アドバイザー：濱崎
- 滋賀県ニホンジカ第二種特定鳥獣管理計画検討会…………… アドバイザー：濱崎
- 滋賀県イノシシ第二種特定鳥獣管理計画検討会…………… アドバイザー：濱崎
- 兵庫県野生動物保護管理運営協議会…………… 委員：岸本(真)

- 福岡県サル被害対策検討幹事会 …………… 有識者：清野
- 福岡県特定鳥獣（イノシシ・シカ）保護管理検討会…………… 委員：横山
- 富津市高宕山自然動物園在り方検討会 …………… 委員：白井
- 日本哺乳類学会 哺乳類保護管理専門委員会…………… 委員：岸本(真)
- 日本哺乳類学会 外来動物対策作業部会…………… 委員：白井・佐伯・渡邊
- 日本哺乳類学会 ニホンザル保護管理検討作業部会…………… 委員：清野・海老原・三木・藏元
- 日本哺乳類学会 シカ保護管理検討作業部会
…………… 副部会長：横山、委員：濱崎・岸本(真)・岸本(康)・大西
- 日本哺乳類学会 クマ保護管理検討作業部会…………… 副部会長：中川(恒)
- 日本哺乳類学会 イノシシ保護管理検討作業部会…………… 部会長：岸本(真)
- 日本哺乳類学会 カモシカ保護管理検討作業部会…………… 委員：西村・関
- 日本霊長類学会 霊長類保全福祉委員会…………… 幹事：白井
- 日本野生動物医学会 …………… 顧問：岸本(真)、評議員：後藤
- 日本野生動物医学会専門医協会 …………… 会長：岸本(真)
- 日本野生動物医学会会長諮問委員会「苦痛度判定と安楽殺に関するガイドライン」作成委員会
…………… 委員：岸本(真)
- 日本野生動物医学会 ニュースレター編集委員会…………… 委員：後藤
- 野生生物と社会学会 学会誌編集委員会…………… 委員：岸本(真)
- 野生生物と社会学会 青年部会 …………… 役員：本橋・渡邊
- 野生生物と社会学会 ワイルドライフ・フォーラム誌編集委員会 …………… 副編集委員長：本橋
- 日本生態学会 保全生態学研究編集委員会…………… 委員：岸本(康)
- IUCN /Species Survival Commission (SSC)/ Primate Specialist Group/日本グループ…………… メンバー：白井
- TWS / The Wildlife Society / International Wildlife Management Working Group…………… 委員長：大西
- TWS / Southeast Section of TWS…………… 秘書：大西
- TWS / The Wildlife Society / TWS Japan Student Chapter …………… とりまとめ役：大西
- 野生動物の形態、生理、生態等に関わるデータ・試料の蓄積
- 野外における野生動物の麻酔方法の検討

『FIELD NOTE』は会員の皆様の情報交換の場です。

各種お知らせ・イラスト・原稿・ご意見・ご感想を募集しています。

内容・分量・書式は問いませんので、お気軽にお寄せ下さい。

編集部一同、お待ちしております。

次号No.163は2024年7月末発行予定です。

原稿は7月8日までにお寄せ下さい。

FIELD NOTE
フィールドノート
2024. 4. 30 No. 162

発行：WMO／（株）野生動物保護管理事務所
〒192-0031 東京都八王子市小宮町922-7
TEL 042-649-1385 FAX 042-649-1386
URL <https://wmo.co.jp/>
E-mail WMO_fn@wmo.co.jp
発行責任者：奥村忠誠
編集：『FIELD NOTE』編集部
郵便振替：00140-4-63739 年会費：¥2,000

無断転載を禁ずる